



推薦図書を紹介

杉本 順則 陸自77

井上義和・坂元希美著 『人はなぜ特攻に感動するのか』 光文社新書



本書は、戦争をめぐる感情の核心に真正面から向き合った、きわめて刺激的かつ冷静な一冊である。

本書の問いは単純で深い。「多様性の時代」と言われ、好みも価値観も人それぞれだとされる現代にあつて、なぜ特攻という極限の行為が、世代を越えて人々の心を揺さぶるのか。賛否を超えて、そこに「刺さる」感情の構造を解き明かそうとする。

著者らはまず、特攻隊員の遺書が放つ力に注目する。それは誰かを感動させようとして書かれた文章ではない。家族への思い、未来への祈り、淡々とした覚悟—いわば「意図せざる感動」である。その率直さが、読む者の胸を打つ。一方で、映画や小

説は明確に感動の構造を備える。「意図された感動」である。たとえば、「永遠の0」や「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら」さらには「ゴジラ1・0」などを素材に、自己犠牲や使命、祖国の危機という物語装置がいかに現代的感動へと組み替えられていくかを丁寧に読み解いていく。

印象的なのは、「命を粗末にしないこと」と「命を惜しむこと」は同じではない、という指摘である。ここでは「死ぬための戦い」ではなく、「未来を生きるための戦い」という意味づけがなされる。死亡の有無ではなく、命をどう使うのか（＝使命）、という問いが、使命や誇りの問題として提示されるとき、人は深く揺さぶられるのである。

本書は特攻を賛美する書ではない。否定のための書でもない。感動の背後にある心理、神話、祖国意識、名譽観といった要素を冷静に分析し、戦後日本が抱えてきた負い目や記憶の問題にも光を当てる。その姿勢は、感情的な議論が先行しがちなテーマに、理性的な対話の土台を提供する。

特攻をどう評価するかは読者に委ねられる。しかし、なぜ人はそこに心を動かされるのか—その問いに向

き合うことは、戦争の記憶を未来へどう継承するかを考える営みでもある。本書は、そのための格好の導き手となるであろう。



寄贈図書を紹介

編集委員会

柳秀直著『苦惱するドイツ ロシアのウクライナ侵攻による大転換』

一藝社

著者の柳秀直氏は、1982年に外務省に入省、ドイツ連邦共和国コンスタンツ大学留学、外務省本省での勤務に加えて、在オーストリア大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館等で外交官として活躍し、2017年から駐ヨルダン日本大使、2020年から駐ドイツ日本大使の要職を経験して、2024年11月に退職しました。

本書は、駐ドイツ日本大使在任中に勃発したロシアのウクライナ侵攻という現代史の大転換点を外交官としての深い見識と豊かな経験を通じて見続けてきた柳元大使が心血を注いで書き上げた渾身の作品です。ロシアの暴挙によりこれまでの外交・経済政策が根本から覆されたドイツの「苦悩」と「再生」が記述されて